

# 都市景観の形成と人間への影響

山 岸 政 雄

はじめに

都市景観の生成、保持、推移、保存、及び人間への影響を考察することは、都市地域生活共同体（都市コミュニティー）の社会構造、社会集団としての基本的類推と深いかかわり合いを持つと考えられる。小稿では、かかる標準的人間集団が、地理、地形、人口構成、習俗、気風、住民層、街区形成過程など、地域や風土と自然的、人為的にかかわり合いながら織りなす景観の位相、相貌を、都市コミュニティーの類型を中心モデルにして考察したい。

①人間、近隣共同体から都市コミュニティーへ

人間は生れながらにして孤独、孤立の実生活を送ることは不可能に近い。創世前より、自然の脅威から身を護り、明日の命を継ぎ、子孫を残すために、生得的状況に甘んじて農耕を営み漁をなし獲物を追った。時には自然に身を委ねて遊牧の民ともなった。それはまた運命共同的な秩序体としての社会集団を形成する前提でもあった。社会集団、とりわけ組織集団は、家族親族及び村落、農村、都市など血縁、地縁の系列で代表される基礎形態を持つ集団として、生産と消費に基く落差相関の複合機能集団、つまり、政治—国家、政党。経済—企業、組合。文化—学校、宗教等の諸集団と相俟って、社会生活における志向照準の根幹をなしてきたといえる。複雑極まりない社会集団の類型区分は既に知られているごとく、H. スペンサー (H. Spencer) の軍事型社会と産業型社会、F. テンニース (F. Tönnies) の説くゲマインシャフト (Gemeinschaft), ゲゼルシャフト (Gesellschaft) の自然意志的及び選択契約的類型、É. デュルケーム (É. Durkheim) の機械的環節と有機的連帯を基とする区分、F. ギディングス (F. Giddings) の同類意識を前提とした生成社会と組成社会の区分、さらにC. クーリー (C. H. Cooley) の家族、近隣、遊戯集団を基本とする有名な第1次

集団説 (Primary group)<sup>(1)</sup>, そしてコミュニティー (Community) とアソシエーション (Association) の類型区分がR. マッキーバー (R. M. MacIver) によって提唱された。コミュニティーはマッキーバーの指摘によれば「人間の共同生活が営まれている一定の地域に住んで生活の種々の側面にわたってお互いに接することにより、おのずから共同の社会的特徴を生じているある程度の包括性や自足性をもった社会や集団」<sup>(2)</sup> という類似と共同の形態、構造を背景にした社会生活の形態であると考えられた。例えば村や町、都市、地方、民族などが含まれることになる。この地域的共同生活体の生成と発展の歴史は、「神は田園をつくり、人は都市をつくった」<sup>(3)</sup> との言辞に象徴されるごとく、常に自然とかわり合って、人間の飽くことなき文明への自己増殖的結節点を現象してきた。初源に溯ればメソポタミア (Mesopotamia), エジプト (Egypt), インド (Indus), インカ (Inca), マヤ (Maya), アステク (Aztecs) の文明では、人間自身が熱帯、亜熱帯、山地の環境を克服して生活共同体を営み栄え、ギリシャ (Greece), ローマ (Roma), 黄河のように温帯 (湿潤温暖, 西洋海洋性, 地中海式冬期乾燥気候), 冷温帯 (温潤大陸性気候) の環境で芽生えたもの<sup>(4)</sup> を含めると、有史以来、人間が人間のための都市的集落ないしは都市的社会を形成してきたことに疑いをはさむ余地はない。「世界の歴史は都市の歴史である。しかして都市の歴史はウル (Ur) に始まる」<sup>(5)</sup> 「さあ町と塔とを建てて、その頂きを天に届かせよう。そしてわれわれは名を上げて全地のおもてに散るのを免れよう」<sup>(6)</sup> とバベル (Babel) の塔に纏る創世記の一節を思い出す。また今もって盛衰が謎につつまれている多くの都市を知るときそこに、人間の都市への執着が感じられる。例えば、イラク北東のシルクロードの都市で正倉

院の紋様に影響を与えたるCの都市アルベラ (Arbéles), マラリヤで廃虚と化し「失われた時をもつ風景」として残るサンタ・マリヤ・デ・ガレーリヤ (S. Maria di Galeria, イタリア), 市民自ら火を放ち55日間炎上し続けて消えたフスタート (al Foustât, エジプト), ベスビオ山の爆発と溶岩流の下に眠るタイムカプセル都市ポンペイ (Pompei, イタリア) などである。本格的な都市の確立は, ヨーロッパではギリシヤ, 古代ローマを経て, 貿易と手工業, ギルド (guild) や, 貨幣財産の確立, 封建制に反対しての自治政治の発達に支えられた10C~12C頃の中世都市をもって確立したといえよう。そしてイギリスでは城郭都市が, フランスでは城塞都市が築かれた。その後, 資本主義の芽生えに伴う流れ作業と機械革命を経験しながらルネサンス (Renaissance) 都市が花開く。ルネサンス都市はまた大砲からの脅威と支配階級の権威誇示の顔をもっていた。ルイ14世 (LouisXIV) によるヴェルサイユ宮殿 (Palais de Versailles) や, 美しいパリのリヴオリ街 (Rivoli) もまた為政者の姿を反映し壮大風 (Grandmanner) として結実した。18C~19Cに至るとロンドンを始め近代メトロポリス (Metropolis) のような巨大化した都市時代を迎え, 現代都市へと引継がれる。日本における都市生成の契機は, 西川幸治氏の指摘によれば<sup>(7)</sup>「魏志倭人伝」の「祖賦を収む, 邸閣あり, 国々市有り。有無を交換し, 大倭をして之を監せしむ」に兆がみえ既に祖賦が徴集され, 交換のための市場や, 監理人としての大倭がいたという。3C前半のことであった。以後, 藤原京, 平城京, 長岡京, 平安京から中世の民衆, 戦国時代の都市的集落や, 自由都市「堺」を経て近世城下町へと継がれていく。以上概観したように個人から, 近隣共同に起因して, 環境発生的, ないしは人間決定論的に拡張した都市的集落 (Urban settlement) や田園的集落 (Rural settlement) はいわゆる「都市」の名が冠せられ歴史を導くことになる。都市とは何かを問い, 定義することは容易ではない。W. ゾンバルト (W. Sombart) は自著の中で, どんな大辞典

をひいてみても都市の定義は混乱していると驚いている<sup>(8)</sup> M. ウェバー (M. Weber)は社会科学の立場から「すべて共通していることは, ただいづれにせよ都市は一つの (少くとも相対的に) まとまった集落 (ジードルング), 一つの「邑」(オルトシャット) であって, 一つまたはそれ以上の住居が孤立散在しているものではない」<sup>(9)</sup> といひ, 呼び名や概念の優位以前の形態を強調している。一方都市社会学の立場からは R. パーク (R.E. Park) が「むしろ都市は心の状態であり, 慣習や伝統や, またこれらの慣習の中に本来含まれ, この伝統と共に伝達される, 組織された態度や感情の集合体である」<sup>(10)</sup> と説いている。M. マクルーヘン (M. McLuhan) の都市概念は更に拡張され「都市は大集団の求めに応じるためにさらに大規模な肉体諸器官の拡張である」<sup>(11)</sup> と考え, 衣服における保温, 調整機能が皮膚感覚の拡張であることと相似すると考えた。かくも都市概念の把握は困難であるが, 今後はむしろ文化哲学, 社会学, 経済学, 心理学等の学際領域の研究に委ねられねばならないだろう。

## ②都市の繁栄と病理

今日もまた人類の所産たる「都市」は, 拡散凝集を繰り返しながら拡大の一途をたどっている。その歴史の中には形態として, 機能として環境に適応出来ぬが故に淘汰され, 或いは集中的結節を繰り返しながら形成され繁栄した都市などさまざまな顔がある。人間にとって「最初のユートピアは都市そのものであった」<sup>(12)</sup> と L. マンフォード (L. Mumford) が言うように, 中世以来の都市は, 文化や思想排出の温床であった。かのレオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci) も都市計画には関心が深く, 中部イタリアのエミリア (Emilia = Romagna) 地方のイモラ (Imola) について「イモラの都市計画図 (A plan of Imola 1502年)」を作成, 城, 要塞, 宮殿, 聖堂, 広場, 道などのレイアウトを円形を用いてデザインしている。<sup>(13)</sup> グビンチはまた「理想都市を發展させた主要人物とみられるジョルジオ・マルティーニと1490年にミラノで顔を合せており」<sup>(14)</sup>,

イタリアルネサンスの揺籃の地フィレンツェ (Firenze) 改造の理想化にも熱心であった。中世をかいま見て Le. コルビジェ (Le. Corbusier) も「そのころ伽藍は白く、思想は明晰で、精神は活気に溢れ、その光景は清らかであった」<sup>(15)</sup> とパリの シャイヨー宮 (Palais de Chaillot) の鐘楼から瞑想し、暗黒の中世との対比をみてとる。都市はまた豪商、貿易商の取引の場でありそこにヴェネツィア (Venezia) やジェノヴァ (Genova) が繁栄した。近代に至ると労働力を極度に集約した生産活動をなし、資本の蓄積と自転作用で栄えたのが近代都市の姿であった。一方繁栄の陰には、社会病理、就中、都市共同体の生むさまざまな病理が顕現する。かつてそれらはスラム (slum) や失業、貧困、非行、犯罪、売春であった。「ローマという都市はかつて存在した都市の中で最も惨めなものであった。有名な大理石の宮殿も貧困の海の中から突き出た半島のような観がする…見すばらしい住宅、高い家賃、つまましい食事にも高い金をとられ、土地は高騰し、狭い都心は人で溢れついに皇帝シーザーは荷物輸送のための車輛通行を夜間のみにした」<sup>(16)</sup> と誇らしさの裏にある古代ローマの惨めさが語られている。2000年前の都市病理である。ロンドン (London) や急速な産業革命による新興都市マンチェスター (Manchester)、リーズ (Leeds)、シェフィールド (Sheffield) には大量の労働者が流入し、醜悪なスラムや種々の都市的病理による疲弊が見られた。かつて文明の第一の特徴は都市であると言ったのは、K. ボールディング (K. E. Boulding) だが<sup>(17)</sup>、今日の都市の病理的特徴はそのまま現代文明の行方を暗示している。それは産業革命当時とは比較すべくもない人口増からくる病理である。爆発的な人口増加は、21C初頭には70億人台に達し、食糧、エネルギー、環境の全てに亘って人類生存の限界が予測され、現にかなりの資源は枯渇しつつある。都市には地球を覆う汚染物質が集中的に充満し、浄化能力さえなく、交通混雑と住宅難は一向に解消しそうにない。F. ライト (F. L. Wright) は「ニューヨークではどこかに行くにはタクシ

ーに乗るよりもタクシーの屋根の上を這って行った方が早い」<sup>(18)</sup> と嘆いたが今日では誰も驚かない。1974年の「世界人口会議」<sup>(19)</sup> では、世界人口行動計画の基礎となる第1章に、1人当りのエネルギーの高消費をする先進国への反論が盛られ、増加する人口の静止策が討議された。最も高エネルギーを消費する先進諸国都市人口への警告でもある。

### ③最適環境と、美的環境。

如何なる劣悪な状況にあっても、現代都市における環境の最適化への試みは常に求められねばならない。前掲のように人間にとってのユートピアが都市であれば、都市のユートピア追求の理念の確立こそ、汎都市化の現代において全人的意味を持つ試みといえよう。かつて環境生成の契機は、自立した生成目的よりも、むしろ、自然の条件、社会的発達段階、経済の進展、技術開発の応用方法に影響を受け、時代を反映した歴史の顔でもあった。しかし現代の都市環境は、労働や交通、憩いのライフサイクルが「住民の個人環境—近隣環境—都市・村落環境—国内地域環境—国土環境—大陸地域環境—地球環境—宇宙環境」<sup>(20)</sup> と相関を保ちながら、人間とそれをとりまく環境へと止揚されていくときに構想される。従って形相的環境でなく形態的環境であり、機能類比的よりはるかに生態的、行動的環境を形成するといえる。一方個人的認識を基礎とする美的環境は、常に他の環境の背景的役割を持つと見なされ、直接的効果として定量化されにくく、故に一般的意識に昇りにくかった。本来人間は、美しく見える自然に対しても、心底には自然への恐怖心が先立ち、それ故逆に徹底して克服しようと試みるか、流れに逆わず従順であるかの二極的態度をとってきたと思われる。都市に於ける美的環境は、まさに自然に対置した高密度人間集団の征服の過程で形成された場合が多いが、それは征服した美的環境を愛でる事はあっても、その環境もまた「生きている」ことでは人間の一部に等しいことに気がつかない認識の欠落があった。アリストテレスはその政治学<sup>(21)</sup> で都市の立地の設計に関して美観にふれている。家屋の配列は、全体を

整然と配列，区画するのではなく，部分的にはぶどう園の「五つ目植」<sup>(22)</sup>のような配列のしかたにすれば，都市は敵の侵入にも耐えやすく美観の点でもすぐれたものとなろうと説いた。この考えは，政治的意図を美観でカムフラージュしたもので後世にも用いられる手法であるが，人間と環境とのかかわりの科学が不在であるが故に，住みよい美的環境にはならない。また堀米庸三氏はその著<sup>(23)</sup>の中で，かつてギリシャの風景は今日ほど荒涼としていなかった，しかしペロポネソス戦争（Peloponnesos, B. C. 431～B.C. 404）後の共同体による共有地（放牧地，森林の共有地—エスカティア—）管理の弛緩に始まる生態系の狂いは一石塁を境界円周に敷き，周辺地の荒廃による水の流入を防げざるを得なくなったという裁判の弁護論から推察して一長年の間にギリシャの美観を衰微させていったと言う説に同感されているが，風土はまた生きていることの証左でもあろう。歴史上の機能を果しすでに過ぎ去った，記念的美観を程しているいくつかの都市をわれわれは知っている。ナポレオン3世（Napoléon III）にパリ改造を命ぜられた（1856）G. オースマン（G. E. Haussmann）は，「大きな建物や邸館やバラックなどを，見ても気持のよいように，祝典の日には往来を容易にし，暴動の際には防禦し易いように除去してしまう」<sup>(24)</sup>旨改造計画をなした。その真意は，市街戦の脅威に対処することであり，ブルジョア勢力とプロレタリア勢力を同時に操ったといわれる民主的独裁政治ボナパルチズム（Bonapartism）の面影を残している。それ以前に計画されたパリで最も美しい街リュ・ド・リヴオリ（Rue de Rivoli）も，ナポレオンI世（Napoléon I）の権威の象徴のためのものであった。都市的基模で外部空間を誇ったものの最初は16Cローマであったといわれているが，美的空間のスペイン広場（P.zza di spagna）やその階段も，目的は，サンタ・マリア・マジョーレ（Santa Maria Maggiore）とトリニタ・ディ・モンティ（Trinita dei Monti）の両寺を結ぶ道路としてつくられた」<sup>(25)</sup>。他の広場や交差点には，噴水やオベリスク（Ob-

elisk）が設けられて美しく整備されたが「裏通りは後廻しにされて，膝まで没する泥濘の道であった」<sup>(26)</sup>と言う。また，18C最大の都市江戸も「君臨する江戸城を守ることが前提とされ…袋小路や密集住宅にかこまれ」<sup>(27)</sup>といった状態で，都市コミュニティとしての美観は，付随的結果の景観でしかなかった。このように迎ってくると，美的環境の発生条件や実相の位置づけは，全体画一的な発頭ではなく，個人を軸とする都市地域社会の潜在的活力と，自由な生存関係が並立することを前提にした生態的，能動的構造を持たねばならない。それが汎都市化時代に於けるユートピア最適環境の前提になると考えられる。

#### ④都市景観と混乱する視覚環境。

日常われわれの目に映する自然の風景や，特色ある景色は，一定の環境における自然と人間の営みの結果として現象したものと理解している。都市の景観価値は，そのような営みの構造が最適であるかどうかの指標となる時初めて意義をもつだろう。都市景観はまた，人口増に悩む都市病理のバロメーターとしてもみることが出来る「景観をあらゆるドイツ語のラントシヤフト（Landschaft）が本来，地表の形態だけでなく，形の奥にある本性を意味する」<sup>(28)</sup>のように，景観価値は，自然の価値であり，文化価値でもあるといえよう。現代の大部分の都市にみられるように，拡大で荒涼としたビル群と，密集住宅街のアンバランスな人工材の集積が，都市における自然景観の喪失と文化景観の極度な混乱を表わしていることは自明なことだが，より危惧されることは，都市住民にとって，S. シャマイエフ<sup>(29)</sup>（S. Chermayeff）の指適する，人間種族にとって健康であるための生理，感情的反応系が攪乱され，侵されていくことへの文明的危機感がないことである。技術を保持し，自由意志によって自ら築いた都市環境を「社会学的狂人用締具」<sup>(30)</sup>と言わしめねばならなくなった今日の都市状況は更めて問われねばならない問題である。人口増と人間疎外に対応しきれず，自らの怠情も加わって，環境とのかかわりに破綻を来たしつゝある今日の視覚環

境の状態は、環境の結果は反作用の集積と指摘し「景観から何かをひき出したり、それを維持管理したり、それに何かを付け加えたりする、新しいシステムのあらゆる可能な効果を考えることをしなかったことから派生する」<sup>(31)</sup>との論に帰結する。感性としての視覚環境の混乱は、また眼前に現象しながら、意識に上りにくいが故に見過され、混乱は可及的に拡大する。都市が汎都市化し、都市人の行動圏が拡大するとき視覚環境は極めて行動的、動態的性質を帯び、都会の風景、農村の風景といった区分がなくなり、コミュニティーに於ける風景や景観概念が攪乱された中で混乱が続くことになる。「駅名を消してしまえばどこがどこやらどの町も似通ってしまった、…三角屋根に極彩色のペンキを塗ったドライブインの隣はゴルフ練習場…」<sup>(32)</sup>「個々の建築というより、私にとって気になったのは、都市景観です、高低さまざまなビルがあまりにも乱雑です、商業主義にかきまわされて統一をぶちこわしている」<sup>(33)</sup>とH.リード(H. Read)は東京を観てとり、ヨーロッパでも同様むつかしい問題になっていると説く。「石灰岩を掘ったため山の一部がハゲ山になった、会社は緑色の塗料をそこに吹きつけた自然に対する認識がまったく欠落し…おそろしいほどの人間のおごり、たかぶりがある…自然の生態への無知は社会悪として指弾される」<sup>(34)</sup>「いたるところの景勝地には殺風景な展望台が立ち、風景を台なしにしている…日本の都会はいづれもおもちや箱をひっくり返したような混乱におちいつている…昔の文化の博物館ともいえる京都の祇園筋にも全く不調和な現代建築が出現した…美的考慮の欠けた住宅やアパートが都市をいよいよ醜くしていく…後日こうした非人間的な集合住宅が日本の大きな社会問題になるのではないか」<sup>(35)</sup>「どんな田舎の町でも、店舗の看板、製品の売込みポスター、映画やプロレスの宣伝、選挙や講演会の案内、ビル全体につけられたネオンは…建物の壁といわず屋根といわず、ところきらわす埋めつくし、これに加うるに交通標識や信号が一緒になって都市全体を覆ってしまう」<sup>(36)</sup>この様な環境の変化は

既に和辻哲郎氏やB. タウト(B. Taut)によっても次の様に書かれている「道路が抜けられ…交通が便利になることをただその便利になるという視点からだけ見ていた。しかしそれは…家や町との間の不釣り合いを道路と家や町との間に押しひろげることにほかならない」<sup>(37)</sup>と昭和初期に和辻氏は洞察している。氏はこれを日本現代文明の「錯雑不統一」と評している。タウトは昭和11年10月日本を去る印象として「やがて列車は最も非芸術的に建設されたこの都市をあとにし、美しい入江と紺碧の海とのある日本のリヴィエラにさしかかった…この国の近代的な発展や、近代的な力の赴く方向を考えると日本が何かおそろしい禍に脅かされているような気がしてならない」<sup>(38)</sup>と印象を記している。自然のサイクルに強引に割込み資源を獲得する過程で技術を駆使して至った結果がこの混乱でもある。若干の救いは、自然の営みは余りにも偉大であったが故に破局を迎えずに済んでいたことであろうか。

#### ⑤景観の心象

人間はその環境認識において誤ちを犯しながらも一方では、自然摂理への限りない憧れを抱き、その風景や景観と人間の関係に深い想いを回らしてきた。「英国の景色が絵の世界を思わせるのと、英国人が世界中に出掛けて行って自分たちの国と似ても似つかない所に根を降したということは…土地に対する愛着ということを先づ彼等の国の風土に教えられ…そこでどう住むべきかを彼等に思い出させた」<sup>(39)</sup>と、美しい風景の人間に与える影響の大きさを知らされる。中世への回帰と自らのビジョンを描いたW. モリス(W. Morris)は、「ユートピアだより」の中でテムズ河上流の「野原の静かな美しさの中で一つ変わったことにわたくしは気がついた…柳の木はしばしば枝を摘まれていたがこれはある程度美観を気づかしておこなわれたのである…」<sup>(40)</sup>野原というものは、すべての人々の生計のためであり、楽しむための庭園であるべきところとして取扱われている。そこには詩人としてのモリスの心象もうかがえる。歴史と風景が深く関わっている例として、オースト

ラリアの東南端タスマニア島 (Tasmania I.) の風景は、「過去る回にわたって外部からの影響を受けたことが、だれの目にも判るように記されている」<sup>(41)</sup> という。建造物は、石積の家、橋、教会、監獄など19C初期、産業革命前のもの、続いて赤レンガによるヴィクトリア朝 (Victoria) の産業革命最中の19C様式と、スチールとガラスの現代様式であり、影響を与えたイギリスは、ニューデリー (New Delhi) など他の植民地でも頑迷なまでにイギリス式庭園や風景をつくっていったが、タスマニアのそれは、本国に見限られた人たちの望郷の念が執拗なまでに感じられる風景だという。最も景観や風景に関心を持ち、美しさを享受して来たのはイタリヤ人であり、古代にあっては「ホメロス以降は自然の人間に与える強い印象は、無数の個々の言葉や詩句から輝き出している」<sup>(42)</sup> と該博で透徹した洞察力で知られるスイスの文化史家 J. ブルクハルト (J. Burckhardt) はいう。吟唱詩人ホメロス (Homēros) の叙事詩と合せ考える所以である。さらにブルクハルトの文化史観を受け継いだオランダの文化史家 J. ホイジンガ (J. Huizinga) は、主著「中世の秋」で単調で平板な景色がオランダ人を幻想のない生活態度、忍耐づよい航海者、辛抱強く貴重面な商人に育てたと述べている。形象的な認識観を持つホイ・ジンガの一面がそこにみられよう。極めて素直な良識をもって風景を観ているフランスの哲学者 E. アラン (E. C. Alain) は、「社会生活において絶えず人間の顔を研究するという痛ましい緊張に疲れた魂にとっては…選択と判別を行う思想の慎重さを全く含まぬ事物の眺めは、知覚者であるという単純な喜びを意味する」<sup>(43)</sup> との真理に触れている。象徴としての風景、事実としての風景、幻想の風景理想の風景を叙述している美術史家 K. クラーク (K. Clark) は、その風景画論の中でも特に「自然と人間との親密な交流のしだいな喪失に対する嗟嘆である」<sup>(44)</sup> と結論づけていることは、永い文明における自然観の衰退をも予感しているように考えられる。柳田国男氏は風景の成長について、人間の文明化は風景を変えてい

くと考えた。それは都市の風景、景観が「象徴景観」として人間と深く関り合ってくることを記したのであろう。マスカルチャー論の R. デニー (R. Denney) は更に範疇を拡大して「都市は眼に語りかけると同時に筋肉や耳にも話しかけるべきだ。この意味では、未来の完全な都市がオーディオミーターを手にした盲人によって見出され…」<sup>(45)</sup> と視覚外象徴景観を予想する。社会学者と詩人の心が重った広範な展開であろう。景観の心はまた、「原っぱや空地、校庭公園、林、神社、田圃、畑、庭、河川敷、土手など…子供達の遊べる空間があって初めて、「思い出景観」となりうる」<sup>(46)</sup> という行動的発想は大切にされねばならない。思い出に連なる遊び空間の崩壊は、子供達の交遊空間を室内へ追いやり、その結果「金を盗む」「洗濯物を汚す」など本来自然と関わってあった「いたずら」の観念さえ変えてしまった。視点を更に拡大するならば「自然界には、仮象にすぎないある種の現象が存在する。虹とか、蜃気楼、静かな水面や他の光る表面に映る単なる映像などである」<sup>(47)</sup> と S. ランガー (S. K. Langer) により虚の創作空間として抽出されたものがある。透明効果、霧の効果、光沢質、輝き、鏡面反射などを含むこれらの仮現々象は、風景や景観の質としても高いものといえよう。蜃気楼の富山湾や、吃水線で面対称に映ずる湖畔の風景風土の気象と結び歳時記に加えられる虹の現象等「仮象景観」とも呼べる景観の心象でもある。思い出景観や仮象景観も代謝系に非ざる「都市の愛着系」<sup>(48)</sup> として都市景観の構成に不可欠のものであろう。形相的な景観のとらえ方は都市のシンボルとしては不確かなものであり「環境を構成する物質、あるいは情報の交換の在り方は、環境内の人々に意味を喚起し、意味の重ね合せが物語を形成する」<sup>(49)</sup> という論理と対比させるならば、多次元の環境に組込まれた象徴としての景観像が現われ、予見的意味での景観の心をそこにみることが出来はしないだろうか。

#### ⑥ 景観の分析

都市環境を支配する部分相互間に不調和が生

じたとき、都市景観もまた調和を失い、自足による回復が不可能になる場合が生ずるが、このように想定される状態や現に進行しつつある景観あるいは風景に客観的、予測的アプローチをする研究がいくつか進められている。例えば景観の自然的要素と人為的要素を一つの総合的システムとして展開したG. エクボ (G. Eckbo) の景観論<sup>(50)</sup> や、健全な都市景観像を追求したアーバンランドスケープデザインにおける構想。M. I. T.<sup>(51)</sup> の G. ケペシュ (G. Kepes) と協力した K. リンチ (K. Lynch) の都市における知覚形態に焦点を合せた考察と都市の形態と活動の関係研究<sup>(52)</sup> が注目される。景観評価モデルにメッシュアナリシスを導入し、<sup>(53)</sup> 分析合成、検索、処理の手法を開発したハーバード大学デザイン研究科の成果は、コンピューターを駆使した今後も発展性の高い理論と思われる。また都市のすき間に生れた空間を都市生活の母体とし…環境の物的特質を偉大なる芸術形式として取り上げたL. ハルプリン(L. Halprin)<sup>(54)</sup> は、かのF. オルムステッド (F. L. Olmsted) の言う「Landscape Architecture はひとつの—美術—である、そしてその意味で最も重要な機能は人間の活動環境—美—を創造することである」<sup>(55)</sup> という流れを継いで、商店街、近隣公園、共用の庭、ベンチ、時計、キオスク、床面、垣、壁、植樹、眺望、スカイラインと詳細にわたって都市の景観演出装置を分析している。

#### ⑦景観政策

詳細に分析解明されるであろう景観の諸現象も、具体的な景観計画ないしは保護、開発、修景のアイデアや処法、政策に裏打ちされ、高められた思想の形成がなされねば徒労に終る。都市空間に位する景観は、本来個人的認識の過程でイメージされながら、物的実体としては共有されているものである。絵はがきや、映画、TV、航空撮影にみられる様な非日常的代理経験を除けば、まさに日常的な享受経験そのものである。従って景観イメージのもたらす像は、都市政策そのものでもある。更に環境問題として、景観認識の政策への反映をみるならば、そこには都鄙感覚を越えた諸相がみられるのだら

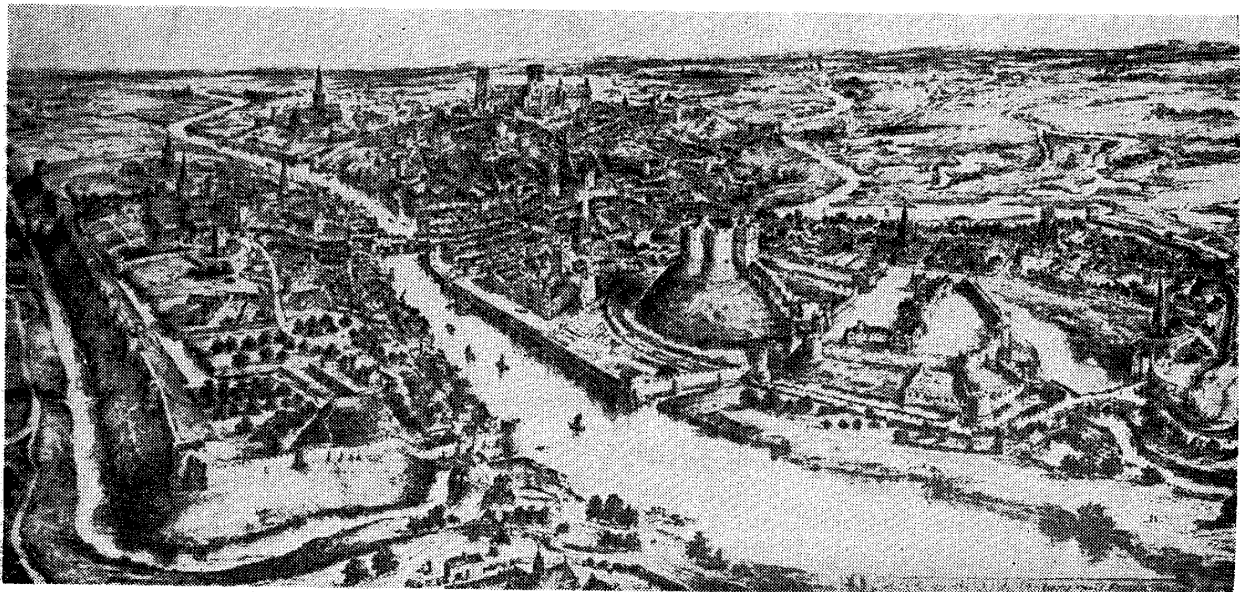
う。我国で環境問題が台頭し始めたのは・1644年(正保1)幕府が山林の乱伐を禁じたあたりからである、鎖国直後の事情もあり資源節約の目的があったのかもしれない。<sup>(56)</sup> 以下・印同註・1859年には早くも英国史跡と風景保存協会が設立された・アメリカでも世界最初の国立公園としてイエローストーン公園 (Yellowstone Park) が1872年に設立された。日本も明治に入ると築地居留地を含めた市街地の様式化と街路の修築が計画されている。1874年(明治4)であった。<sup>(57)</sup> その後1889年(明治22)には、東京市区改正条例が公布され<sup>(58)</sup> 一帝都一の発想が生れた。・1895年英国で自然・歴史環境保護団体ナショナルトラスト (National trust) 創立、・1919年(大正8)史蹟名勝天然記念物保存法と都市計画法、市街地建築物法が成立したが「実体は、街路法定区画整理地域制であり…極端に言えば道路をつくれれば都市計画の大筋は完成した。<sup>(59)</sup> 同年ドイツではワイマール憲法に自然環境保存の条文が盛り込まれた(150条)、1930年フランスでは「景観保護法」が成立した。・イギリスでは1944年、第二次世界大戦の最中であるにもかかわらず政府白書—土地利用の規制—の中に、海岸や田園の楽しみを国民に確保しておくことを盛り込んだ。・1950年(昭和25)我国で文化財保護法がようやく公布された。くだって1964年にはアメリカのジョンソン大統領 (Lyndon Johnson) は、かねてから関心を示していた都市問題について、「偉大な社会とは、人間の都市が、都市自身の必要や、商業活動の需要に対してでなく、美に対する欲求や、よきコミュニティーへの熱望に貢献しうる社会のことである」<sup>(60)</sup> と強調している。近年我国における国政レベルでの施政発言は、「自然の保護に配慮する」旨の1970年(昭和45.2)第63国会の佐藤首相や、また「国連人間環境会議」<sup>(61)</sup> で日本代表の大石環境庁長官は、日本は四季おりおりの美しさにいろどられ、何世紀にもわたって自然を愛し、自然と共に心豊かに生きてきたが、近年河川は汚濁にまみれ、都市は過密化し、貴重な自然は破壊され始めたと報告、環境破壊は人間の精神をもむしばみ始めたかと付加えている。

・「全国の自然環境保全の基本方針を樹立する」1973年(昭和48.1)第71国会, 田中首相などであるが, 欧米諸国に比べると政策面での遅れが大きい。環境が人間に及ぼす影響を学際領域から研究するための文部省の総合研究班が1973年に発足, 「都市の物理的, 心理的, 生理的環境に及ぼす建築物の影響にかかわる学問の体系化に関する研究」<sup>(62)</sup> というテーマを決定した。我国の環境行政は1971年環境庁発足以来, 景観に影響するものでは, 尾瀬自動車道の中止や, 自然環境保全法等の施策, 施行がなされ, 数次にわたる環境白書も出された。白書中景観に関するものは「都市・森林等における自然環境の保全」<sup>(63)</sup> 等の項で, 風致地区, 都市公園, 近郊緑地等, 古都における歴史的風土の保存, 史跡, 名勝, 天然記念物の保護がとり上げられている。1973年9月, 第4回アメリカ環境白書は, CEQ(環境諮問委員会)の報告に基き, ニクソン大統領によって議会に送られた。その中で土地利用規制に触れ, 「現在では我々の土地利用には限界があることを知っている, これは物理的な土地の収容力の限界のみならず, 人間精神の限界である。すなわち, 我々は周囲に美と秩序と多様性を必要としているからである」<sup>(64)</sup> と報告された。今世紀の初め, もはや, 開発の余地のあるフロンティア(辺境)はなくなったと天然資源保護政策で耐えたセオドアルーズベルト大統領(Theodore Roosevelt)の発言<sup>(65)</sup>

と併せ考えると環境政策は, 自分の環境を形成するまさにその過程で, みずからをつくり, 文明をつくり出すのだというR.デュボス<sup>(67)</sup> (R. Dubos)の考察に戻っていく。

#### ⑧諸相の都市景観への反映

先に述べたように, 自然的, 人工的風景ないしは景観における類似や共同の特性値は, 地域性にトータルされると考えられてきた。諸外国はもとより, 日本の都市景観も過去においては地域の風土を背景に, 幾多の相貌を展開してきた。しかし今日の都市景観は, 特に19C巨大都市(メトロポリス)以降の過大都市において, 人類が経験したことのない都市化現象によって, 人間が住むための都市から, 都市に住める人間のみを淘汰する空間へと変質する中で混乱を呈しているといつてよい。かつて都市は, 農村を背景にした物的, 精神的な交換や中継の場として, あるいは, 貿易と手工業の社会に支えられた中世都市や, 近代資本主義を基盤とする近代都市まで, 何らかの意味でその時代の人々が都市の顔, 景観をつくり, 顔が明確に地域社会の成長や矛盾を察知するバロメーターであり得た, 極端な例として, イギリスのヨーク(York)とアメリカのニューヨーク(New York)にそれをみる。6C末, ノーサンブリア(Northumbria)の国府として誕生したヨークは, 15Cには既にイギリス北部の城郭都市として栄え, 18Cにはヨークを手本にニューヨークがデ



“York in the XVth Century”<sup>(66)</sup>



ザインされた。その後ニューヨークは、第1次大戦後すでにLe. コルビジェ (Le. Corbusier) をして、マンハッタンの摩天楼は「20世紀が人間のために建築せず金銭のために動いていることを知った」<sup>(68)</sup>と感ぜしめたように、効率的な経済自転の顔としてスカイラインが天を突くに至った。一方ヨークは、今もって人口15万人程度の歴史都市として美しい景観を保持し、同じイギリスのバース (Bath), チェスター (Chester), チェスター (Chichester) と共にシヴィック・アメニティ・アクト (Civic Amenities Act) によるパイロットプロジェクトの対称になっている。<sup>(69)</sup> また中部イタリアの美しい多塔都市として既に名高いサン・ジミニアーノ (San Gimignano) の景観は、時のフィレンツェ (Firenze) やシエナ (Siena) から強圧を受けたといわれる自治共和国の苦しい時代に、貴族の住む城塞として作られた。それは物見櫓や砲塔を備えた権威のシンボルとして築かれたものの都市景観でもあった。<sup>(70)</sup> この様に社会構造の違いは、そのまま都市の発達と矛盾を抱え景観の相違となって露呈してきたが、シヴィックアメニティを模範的に追求する都市といえども現代都市に共通の難題から逃れることは出来そうにない。それはまた新たな景観の質となって顕現する。理想環境的な質を追求してやまなかったいくつかの試み、例えば今世紀初めロンドン近郊のウエルイン (welwyn), レッチワース (Letchworth), ハムステット (Hampstead) に試みられた E. ハワード (E. Howard) の田園都市計画<sup>(71)</sup> や、太陽と緑と空気をシンボルに構想されたル・コルビジェの都市計画、かつて C I A M<sup>(72)</sup> がアテネ憲章を含め30年の成果として残した機能的都市への提案 (住居, レクリエーション, 仕事場, 交通, 歴史的建造物) 等も、急速な技術革新と爆発的人口増による激しい人間の希求欲に根ざす、非固定的, 流動的 時空間意識の台頭により変貌せざるを得なくなった。今や人間とそれをとりまく環境を継ぐ生態系に狂いが生じつつあることは、有機的な地人相関にもみられる、「都市の自然破壊度」を

植生層, 動物層, 地質, 地形, 気候, 市街地土地利用状況の面から類推した堀田氏<sup>(73)</sup> の提示によれば、それはまた風景破壊度の地理的分布でもあるという。現象学の流れを汲む M. ハイデッガー (M. Heidegger) は反映の諸相として、風景や景観は元来自然を斟酌したもので「例えば道路とか市街とか橋梁とか建物とかにおいて自然は配慮的気遣いを通じて、特定の方向のうちで暴露されている。屋根つきのプラットフォームは雨天を斟酌しており、公共の照明設備は、暗夜を、言いかえれば、昼の明るさの有無という特殊な交替、つまり一太陽の位置一を斟酌している」<sup>(74)</sup> と考えた。ヨークやニューヨークにみられた中世から近代メトロポリスに至る景観形成の核となった時代の社会構造と比較して、現代都市が日一日と人間疎外による孤独と断絶の中で近隣共同社会の基盤が崩壊し、その過程がそのまま無性格で無名な都市の顔をつくってゆくことは前述したが、コミュニティーの危機についてすでに W. グロピウス (W. A. G. Gropius) は、「コミュニティーの再建」 (1945) を発表し、崩壊するコミュニティーに警告と復権を示喚した。<sup>(75)</sup> 古いコミュニティーの急速な崩壊は、デモクラシー成長の支障にさえなるとし、無性格な巨大都市コミュニティーに人間的スケールをとり戻すべく有機的近隣計画を提唱している。<sup>(76)</sup> それは、「すべての市民を、地方の行事に積極的に参加させ…行政上のコミュニティーの組織を人間化する」そして「完全な近隣ユニットを基にしたものであること」と提唱し、コミュニティーユニットの最小人口は、5,000人~8,000人の近隣住区を目指すべきとした。更により大きな規模は、25,000人~75,000人の広域コミュニティーへと進み、最大は、都市域そのものに移行するであろうとした。しかしいづれの場合でも「人間は群居を好む動物の一種であり、健全なコミュニティーでの生活によってその成長が早められ改良されてゆく」との前提理念は変らない。このような地域共同体が息づいていくためには、住民の意識の質と景観のアメニティーについての人間的な地域参加、ヒューマンスケールへの姿勢が問わ

れねばならない。コミュニティーを復権し、美しい景観や、総合された環境形成のプログラムを組むことは、人間生活における感性面の貧困化を防ぎ、風景や景観享受の権利を獲得する意味で共通項となる。そして「感性的自然としての風景は、人間主体と客体的自然の間の直接的関係作用として存在する…感性的能力は、風景を楽しむための前提であるが、いっばう楽しめる風景の存在が能力をつくりあげる」<sup>(77)</sup>という自然と人間が不即不離であるとの根本理念に近づかねば景観に関する処法は不可能であろう。

#### ⑨景観プロジェクト

景観文化をプロジェクトすることが、景観形成における手段の選択、保存の可否、修復の方法、復元の技術、修景の目的は勿論、人間とコミュニティーの社会的相関や、都市の病理と最適環境の美的追求まで多岐高密度にわたることは言うまでもない。そこには短絡な美観思想や有機的アナロジーに陥入らない人間と自然の協同相関の思想が必要である。また交流の激しい現代では、各国レベルから国際協力へ、再び各国、各地へフィードバックしながら施策が進められねばならない。ユネスコ<sup>(78)</sup>においては、不動文化財、つまり記念物や地跡の保存に関して5件<sup>(79)</sup>の国際条約と国際勧告を行っているが<sup>(80)</sup>中でも「風光の美と特性に関する勧告—1962」は10余年後の今日、最も注目される視点と思われる。保護されるべきものは「文化的又は美的意義を有するか、あるいは典型的自然的環境を構成する天然あるいは人工的な農村及び都市の景観の保存、及びもしも可能ならばその復旧措置を意味する」<sup>(81)</sup>更に「風光の美と特性が決定的な身体上、道徳上及び精神上的の影響を人類に及ぼし、また国民の芸術的、文化的生活に寄与していることから人類にとって必要である」<sup>(82)</sup>と結論づけられている。加えて各国の事情により概念が希釈されがちな保護基準も「保護 (Protection) は、識別 (Identification)、研究 (Study)、保存 (Conservation)、修復 (Restoration)、提示 (Presentation)、再生 (Lehabilitation) を抱括し、文化及び自然遺産を社会の今日の生活に総合すること」<sup>(83)</sup>により同

一水準の遺産保護が行われ易くなった。顧みるに、近い歴史の過程でも、文化価値の認識の低さと、人間の醜き相剋によって保護されるべき多くの景観を失った例は多い。ポーランドの商都グダニスク (Gdan'sk) はナチスドイツの砲火の前にわずかる日間で壊滅した。その後地図と写真を頼りに完全復元を遂げたが、その執念とも思われる努力は、伝統を重んずる国民性に加え、完全復元により惨禍を繰り返さぬための反面教師の役をも演ずるまでになった。ワルシャワにも同様な経験が残る。第二次世界大戦は、ドイツ自身にも戦禍が及び「リューベック、ケルン、フランクフルト、ニュルンベルグその他多くのドイツの古都を破壊してしまった」<sup>(84)</sup>。また1940年以降には、イギリス経済の逼迫が「クロムウエル軍の砲撃と南海の夢の金融恐慌と産業革命の変動とを無事に生きのびてきたような有名な建物が一夜のうちに税務署に奉られてしまったらしい」<sup>(85)</sup>という。当時美しい海岸風景や沼沢、丘陵、原野の保護に専念していた「史跡景勝地 ナショナルトラスト」<sup>(86)</sup>にとっても思わぬ出来事だったようである。一方保存されるべき景観プロジェクトの目標になるものは各国にわたって数多いが「都市のデザインは時間が生み出す芸術である」<sup>(87)</sup>というK.リンチ (K. Lynch) の言葉に従えば、自ら人間にとっての優等空間も限定されてこよう。若干の例を諸外国にとるならば、ヨーロッパの看板といわれる南独ローテンブルグ (Rothenburg) を中心とする ロマンテッシュェ・ストラーセ (Romantische strasse) には典型的な中世の街々が息づいていることはよく知られている。またドナウ川のほとり、レーゲンスブルグ (Regensburg) や北独の運河と石畳、赤いレンガの港町のリューベック (Lübek) も慎重に観察し、よく調べ、頑固なまでに美しさを守る市民意識とその独自性が、美しく古い街を保存する原因であると言う。ケルン (Köln) でも13C~19Cにわたって完成をみたゴシック建築の粹、ケルン大聖堂 (Kölner Dom) が大気中の亜硫酸ガスが湿った聖堂の壁で硫酸に変わり、石材のつぎ目を侵して崩壊の危機にあることが最近判明し

対策が講じられることになった。<sup>(88)</sup> フランスでは1913年の文化財保護法以来、特別指定記念物 (Monuments classes) と一般指定記念物 (Monument inserits)<sup>(89)</sup> に建造物が分けて保護指定されているが「法的規制はたんに指定された建造物もしくは土地だけにとどまらず、その周辺500ヤード以内の景観 (Field of visibility) にも及ぶ」<sup>(90)</sup> という程に景観を大切にしている。1962年には当時の文化担当大臣アンドレ・マルロー (Andre Malraux) によってつくられた「歴史街区保存法」<sup>(91)</sup> 一名マルロー法 (Malraux Law) では一挙に広域な歴史街区の保存と再開発を決めた。例えば17Cパリの高級住宅街だったマレー街 (Marais) は、「1965年4月に第13番目の保護区として指定」<sup>(92)</sup> された。また最近パリでは、ノートルダム寺院対岸の地下高速道路新設は、周辺の美観が著しく損われるとして大統領ジスカールデスタン (Giscard d'Estaing) が待ったをかけた。<sup>(93)</sup> 前後して同大統領は、レアール (les Halles) 中央市場の商業センター化にも中止命令を出し、景観保護を望む市民を安心させた。イギリスでは歴史的市街地等の保存は、単なる「史料的価値の追求 (Historicism) ではなく、環境的質 (Environment-quality) の追求にある」<sup>(94)</sup> とし、前掲のヨーク市他る都市を選び、住宅地方行政省 (Ministry of Housing and Local Government) のパイロットプロジェクトが行われた。ヨーク市では相当数の観光客と限度を越えた数の車が中世の細い露路を走り抜け、車公害と観光政策及び次第に膨張する都市機能の再配置が急務と思われた。このことは諸外国に限らず我国にも当面する問題であり、「歴史的都市についてみれば魅力喪失の原因は…人口増や工業化に伴う都市内部からの近代化であり、一つは自動車による観光公害である」<sup>(95)</sup> との指摘の通りである。夥しい歴史地区、街区に埋れるイタリアも、景観保存対策に懸命であるが、イタリアは特に「専門化されていない社会において、個人によって彼の社会の伝統と方法と形態を用いて、かれ自身の家族のためのシェルターをたてるという当面の問題を直接処理して作られた環境」<sup>(96)</sup>

による風景、景観と、権力を誇示するために「専門の建設者、彫刻家を雇う高度に複雑な世界的社会の委任によって」<sup>(97)</sup> 達せられた景観の両極が交叉する。たしかにティレニア海 (Tyrrhenian Sea) に面したコバルトやウルトラマリンの海や空を背景にして点々と続く漆喰 (Stucco) の集落を眺めていると、日本についての「群青と緑青の風景だと私は思った」<sup>(98)</sup> とある描写場面が次第に消滅の危機にあるのと同じ程に、イタリアの無名な風景保存の必要を感じる。古くからバグーナ平野の結節点に当る中世都市ボローニャ (Bologna) は、産業構造の変革と共に疲弊と混乱が顕現した。このため1963年ボローニャ市当局は、「①ボローニャの新しい秩序ある発展と②既成都市環境の体系化と新しい都市環境の創造」<sup>(99)</sup> を目指し1967年より丹下氏チーム<sup>(100)</sup> も参加、自然環境の保護、歴史的環境の保存、新しい環境の開発を骨子とする変更計画が出来た。P. R. G. (都市基本規制計画) 変更計画のうち、第6条、既存樹木及び植樹木保護地に関する施行令は、「樹木保護地の内外に見出される既存樹木は…いかなるタイプの樹木地区再整備も、樹木の切り倒しとともに市長の認可を必要とする」<sup>(101)</sup> との策定をしている。これは景観を支える大きなポイントである緑の管理が市民社会又は、生活領域の連帯感を背景に具現しているといえよう。緑による修景は、最も基本的なものであるが「その土地固有のポテンシャルな植生力である潜在自然植生を無視した、よそものの画一的な木で芝生や生垣、並木などをつくっても…ふるさとの緑の景観をつくることは困難」<sup>(102)</sup> であるとの自然の摂理を忘れてはならない。詩情あるイタリアの中世都市、トスカーナの中心シエーナ (Sienna)、前掲のサン・ジミニャーノ (S. Gimignano)、北部ボローニャ (Bologna)、マルケ地方のウルビーノ (Urbino) など景観のプロジェクトも積極的なようであるが、現代都市機能と古都の調和を計るため、既に計画されたウルビーノ市におけるビジュアルなプロジェクトは注目されねばならない。それによると、1960年、ウルビーノ国立美術学院デザイン科のイニシァティブ

で、視覚的手段によって古都の持つ文化財の案内から、交通標識やレストランなど、日常生活全般にいたる情報整理のシステム化が決議された。(103) 景観は、歩行者の1.5mの高さの視角から始まることを考えれば、修景にとって有効な手段となろう。最近ではアルゼンチンのブエノスアイレス(Buenos Aires)市当局は総合的な都市の視覚秩序の一環として「交通標識、案内板、建築物のデザインやその統一化、ポスター、公園のベンチなどを含むデザイン計画の検討を依頼した」(104)。と言う。800万人の同市の景観に効果的影響を与えることは容易なことではないが汎都市化の現代では、積極的にシンボルの操作がなされる必要がある。ただ前掲のF・オズボーンとA・ホイテックが一般的に心配した無定形、無秩序に混乱しつくした世界各地の街頭風景も、ウルビーノやブエノスアイレスで整合される部分は優等区域に限られ易く、同様な計画を促す場合は、十分な留意が必要と思われる。「たかがカンバンだけと言っても、問題は看板だけにすまされぬ、それと同様な美術眼が『都市美』を構成し『郷土美』を築き、さらに大きく国土美を建設していく…街頭の『風景画』もわれわれ民衆の『自画像』である。(105)と早くから指摘されてきたが、その後景観の構造は、急速に「その色彩乱舞の諸相はすでに街が美術館そのものになってしまったことを暗示する…環境のグラフィックは、街の表層を次々に変えさせていく、複製化現象は街と街の差をなくし、多くの街々をひとつの連合体にしてしまう」(106)という時代に至り、環境の価値が自然環境から心理的、象徴的環境へと移行しつつあることは見逃せないこと、いえよう。そこには極端な自然保護論や環境保全論からのみ構築される景観価値論のみでは現代都市の景観認識は生れてこない。

## 結 び

以上コミュニティーの生成から、都市の形成と、そこに生ずる繁栄と病理の問題、最適環境の中の美的側面、そして現代都市の視覚的混乱による景観価値の変質と人間本来の美的環境へ

の愛着の系譜、現代人に果せられるであろう景観を通じての自然とそれを取りまく環境との関り合いの構造と計画に若干言及してきた。その中で見い出された問題点は、一つは、人間の繰り広げる業と自然との間に失われた禁忌の観念であり、もう一つは、人と人の間に充満し尽したとも言える過密な人口増からくる情念の欠如と凝結を起因とする景観の変貌であろうかと思われる。前者においては自然との調和の破壊であり、景観として現象するものの価値を曖昧にし、生態系を狂わし、ひいては、人間が生物として自然のサイクルで生存することを否定する結果となる。対応すべき決定論はまた文明の問題でもあろうが、少くとも人間の感覚受容の主要部分を形成する視覚環境、就中、景観については、無差別的に拡大する欲求を人間自らのコントロールにより、幾分でも改善されることを期待する以外にないであろう。後者においては、極めて個々の人間形成と関係してイメージの質の問題に直面する。複雑極まりない過密な人間集団が錯綜するとき、個々の眼はその中から、自分にないものを本能的に探し廻る。それが何万、何百万の人間の間で増幅されるうちに、巨大な都市のイメージが形成され、虚像となって独り歩きを始める、その中にあって個人のイメージは、自己の創り出した虚像に攪乱され、イメージの創造はもとより享受の権利までその地位を失い、無人称で無性格な個体と化していく。そこには個人として発頭しうる情念や、発想から受容に至る独自性はなく、生成されるイメージは貧困そのものとなる。かかる無性格集団により、形成される景観は物量景観として存在するに過ぎぬか、ときには、極端な形相景観を顕示することにより人びとを驚かせることになる。自然も人間も社会も調和のための事前評価のないまま急増する世界の人口を受け容ねばならないところに鍵があるといえよう。

(註)

- (1) 派生集団として第2次集団(政党, 組合, 学会, クラブ等)が仮説されている。
- (2) 塩原・松原・大橋編「社会学の基礎知識」p.35有斐閣(S.44)
- (3) 磯村英一編「都市問題事典」p. 613 鹿島出版会(S.47)
- (4) 正井泰夫著「都市の環境」p.9三省堂(S.46)
- (5) R. バーノン著片桐達夫訳「都市問題とは何か」p.128鹿島出版会(S.46)
- (6) 「旧約聖書」創世記, 第11章~(四)日本聖協会(1955)
- (7) 西川幸治著「都市の思想」p.58 日本放送出版協会(S.48)
- (8) 鈴木広訳編「都市化の社会学」p. 42 誠信書房(S.45)
- (9) 同上 p.4
- (10) 同上 p.58
- (11) M. マクルーハン著, 後藤和彦, 高橋進訳「人間拡張の原理」p. 154 竹内書店(1968)
- (12) R・イールズ, C・ワルトン共編, 木内信蔵監訳「新しい都市の人間像」p.15鹿島出版会(S.46)
- (13) 山岸健著「レオナルド・ダ・ヴィンチ考」p. 18 日本放送出版協会(S.49)
- (14) 黒川紀章著「都市デザイン」p.102 紀伊国屋書房(1965)
- (15) ル・ユルビュジェ著, 生田勉, 樋口清訳「伽藍が白かったとき」p. 岩波書店(S.37)
- (16) R. バーノン(5)同書 p. 129.
- (17) K. ボールディング著, 清水幾太郎訳「二十世紀の意味」p.3岩波書店(1967)
- (18) S. シヤマイエフ, C. アレキサンダー著, 岡田新一訳「コミュニティとプライバシー」p. 12 鹿島出版会(S.43)
- (19) Aug. 1974, BUCHAREST (RUMANIA)
- (20) 正井泰夫(4)同書 p.3
- (21) 田中美知太郎編「世界の名著アリストテレス」p. 272 中央公論社(S.47)
- (22) 同上ぶどう園 ∴∴
- (23) 堀米庸三「ヨーロッパ歴史紀行」p. 144潮出版社(S.48)
- (24) S. ギーデイオン著, 太田実訳「空間時間建築」2p. 695 丸善(S.40)
- (25) 磯村英一編(3)同書 p. 535
- (26) SD No. 15 MARCH, 「ローマ都市形成史の一断面」p.37 鹿島出版会(1966)
- (27) 紫田徳衛著「世界の都市をめぐって」p. 206岩波書店(1969)
- (28) 水津一郎著「近代地理学の開拓者たち」(iii) 地人書房(S.49)
- (29) S. シヤマイエフ著(18)同書抄出
- (30) R. バーノン著(5)同書 p. 15
- (31) 同上
- (32) 朝日新聞社説「表情のない町」(1973. 8. 10)
- (33) 朝日新聞ハーバート・リード「乱雑な日本の新都市」(1964. 11. 27)
- (34) 朝日新聞社説「山をペンキで塗る思想」(1971. 11. 5)
- (35) 朝日新聞ロベール・ギラン「美の破壊に挑戦を」(1972. 1. 1)
- (36) 上田 篤, 榎並公雄, 高口恭行著「都市の生活空間」p. 6 日本放送出版協会(S.45)
- (37) 和辻哲郎著「風土」p. 159 岩波書店(S.44)
- (38) ブルーノ・タウト著, 篠田英雄訳「日本美の再発見」p. 175 岩波書店
- (39) 吉田健一著「英国に就て」p.5 築摩書房(S.49)
- (40) 五島 茂編「世界の名著ラスキン・モリス」p. 488~489 中央公論社(S.46)
- (41) 高坂正堯著「世界地図の中で考える」p. 42 新潮選書(S.49)
- (42) 紫田治三郎編「世界の名著ブルクハルト」p. 340 中央公論社(S.41)
- (43) E. C. アラン著, 桑原武夫訳「芸術論集」p. 427. 岩波書房(S.46)
- (44) K. クラーク著, 佐々木英也訳「風景画論」p. 222 岩崎美術社(1972)
- (45) R. デニー著, 石川弘義訳「ミューズのおどろき」p. 279 紀伊国屋書店(S.38)
- (46) 田部井明「過程的景観」p. 90 建築文化(1973. 12)
- (47) S. K. ランガー著, 池上保太, 矢野萬里訳「芸術とは何か」p. 35 岩波書店(1967)
- (48) 加藤秀俊編「日本文化の展望」p. 303 日本生産性本部(S.43)
- (49) 原 広司「建築に何が可能か」p. 89 学芸書林(1967)
- (50) G. エクボ著, 久保, 中村, 吉田, 上杉訳「景観論」鹿島出版会(S.47)
- (51) Massachusetts Institute of Technology.
- (52) K. リンチ著, 丹下健三, 富田玲子訳「都市のイ

- メージ」岩波書店(1970)
- (53) C. スタイニッツ, P. ロジャース著, 阿部統訳  
「都市景観のシステム分析」p.40 鹿島出版会(S. 48)
- (54) L. ハルプリン著, 伊藤ていじ訳「都市環境の演出」p. 7 彰国社(S. 45)
- (55) 磯村英一編(3)同書 p. 565
- (56) 朝日新聞「自然保護年表」(1974. 1. 1)
- (57) SD「自治地域空間の構造化」p. 20 鹿島出版会(1971. 10)
- (58) 同上
- (59) 黒川紀章著(14)同書 p. 7
- (60) R. イールス他編(12)同書 p. 26 (1964年ミシガン大学卒業式にて講演)
- (61) 「国連情報」p. 11~12 外務省国際連合局, 1972 6. 5~16 スウェーデン ストックホルムにて開催 113カ国 1200名。
- (62) 朝日新聞(1973. 1. 12)
- (63) 環境庁編「環境白書」p.314大蔵省印刷局(S.49)
- (64) 環境研究 No.5 p.10 公害調査センター(1974)
- (65) 朝日新聞(1974. 1. 1)
- (66) "York in the xvth century" by courtesy of the City of York Art Gallery. (1973.York U. V. にて所収)
- (67) 同上, René Dubos 1901 フランス生れ, 微生物学 1969 ピューリッツ賞受く。
- (68) ル・コルビュジェ著(15)同書 p. 301
- (69) 近代建築 p. 78~79 近代建築社 1973. 1)
- (70) 「トスカナのマンハッタン」(57)同誌 p.77 (1965)
- (71) 吉野正治著「都市計画とは何か」p. 104「明日ー真の改革への平和的の道程」後に「明日の田園都市」と改訂 1898年, 三一書房(1973)
- (72) CIAM Congrès Internationaux d'Architecture Moderne 1928
- (73) 京都大学, 生物学
- (74) 原 佑 編「世界の名著ハイデガー」p. 161 中央公論社(S. 46)
- (75) 佐々木 宏著「コミュニティ計画の系譜」p.10 鹿島出版会(S. 46)
- (76) ワルター・グロピウス著, 蔵田周忠, 戸川敬一訳「生活空間の創造」p. 131 彰国社(S. 40)
- (77) 西山卯三編, 関西グループ著「空間と環境21世紀の設計」p. 308 勁草書房(1971)
- (78) UNESCO (国際連合教育科学文化機関)
- (79) ①武装紛争時 ②風光の美 ③公的, 私的事業の損害 ④世界的文化の自然遺産 ⑤国内水準での文化と自然遺産。
- (80) 関野克「歴史的環境保存の潮流」(68)同誌(1973. 1)
- (81) 同上
- (82) 同上
- (83) 同上
- (84) 笹本駿二「ライン河物語」p. 35 岩波書店(S. 49)
- (85) 法制を中心にみた欧米における歴史的環境保存の動向(68)同誌 p. 71 (1973. 1)
- (86) National Trust for places of Historic Interest or National Beauty 1894 創立
- (87) K. リンチ著(52)同書 p. 1
- (88) 朝日新聞(1974. 1. 9)
- (89), (68)同誌 p. 72
- (90) 同上
- (91) フランスの歴史街区保存法をめぐって(68)同誌 p. 77
- (92) 同上 p. 78
- (93) 朝日新聞(1974. 6. 24)
- (94) イギリスにおける4都市のコンサベーションスタディー(68)同誌 p. 79
- (95) 朝日新聞社説「歴史的町並みの保存と開発」(1972. 3. 14)
- (96) D. ルウイス著吉原慎一郎, 高橋志保彦訳「都市構造の論理」p. 339 彰国社(S. 49)
- (97) 同上 p. 339
- (98) 東山魁夷「風景との対話」p.55 新潮選書(1967)
- (99) 「ポローニヤの実験, 都市基本計画の確立」(57)同誌 p. 60 (1971. 7)
- (100) 東京大学丹下チーム「ポローニヤ 1984 を提案」
- (101) (99) 同誌に同じ
- (102) 都市住宅 p. 88 鹿島出版会(7305)
- (103) グラフィックデザイン 太田 幸夫「ウルビーノ市のデザインポリシー」p. 55 クラフィックデザイン社(1969)
- (104) Graphis "A Buenos Aires-a South American-city creates a contemporary civic image.
- (105) 谷口吉郎「建築と生活」p. 222 学生社(S.41)
- (106) 栗津 潔「デザイン夜講」p. 141~142 築摩書房(S.49)
- 註補一社会学説の範疇及び謎の歴史都市についてはNHK-TVの解説に依るところがある。
- (以上)